

貴族令嬢、
転生5秒で
家出します。



伊野瀬凜

Rin Inose presents

Illustration ふくよかなクマ

The Noble Lady
Runs Away
5 Seconds
After Reincarnating

characters



ロンズ
ルッツの側近である兵士。
変人な上司に
振り回される苦勞人。



サイ
リルの魔法の師匠。
かつて宮廷魔法士だった。
規則正しい生活を好む。



ミニサイズのチョコ
リルの魔法によって
仔犬サイズになれる。



チョコ
リルが山中で出会った
人懐っこいウォルフ。
リルの研究の結果、
背中に羽が生えた。



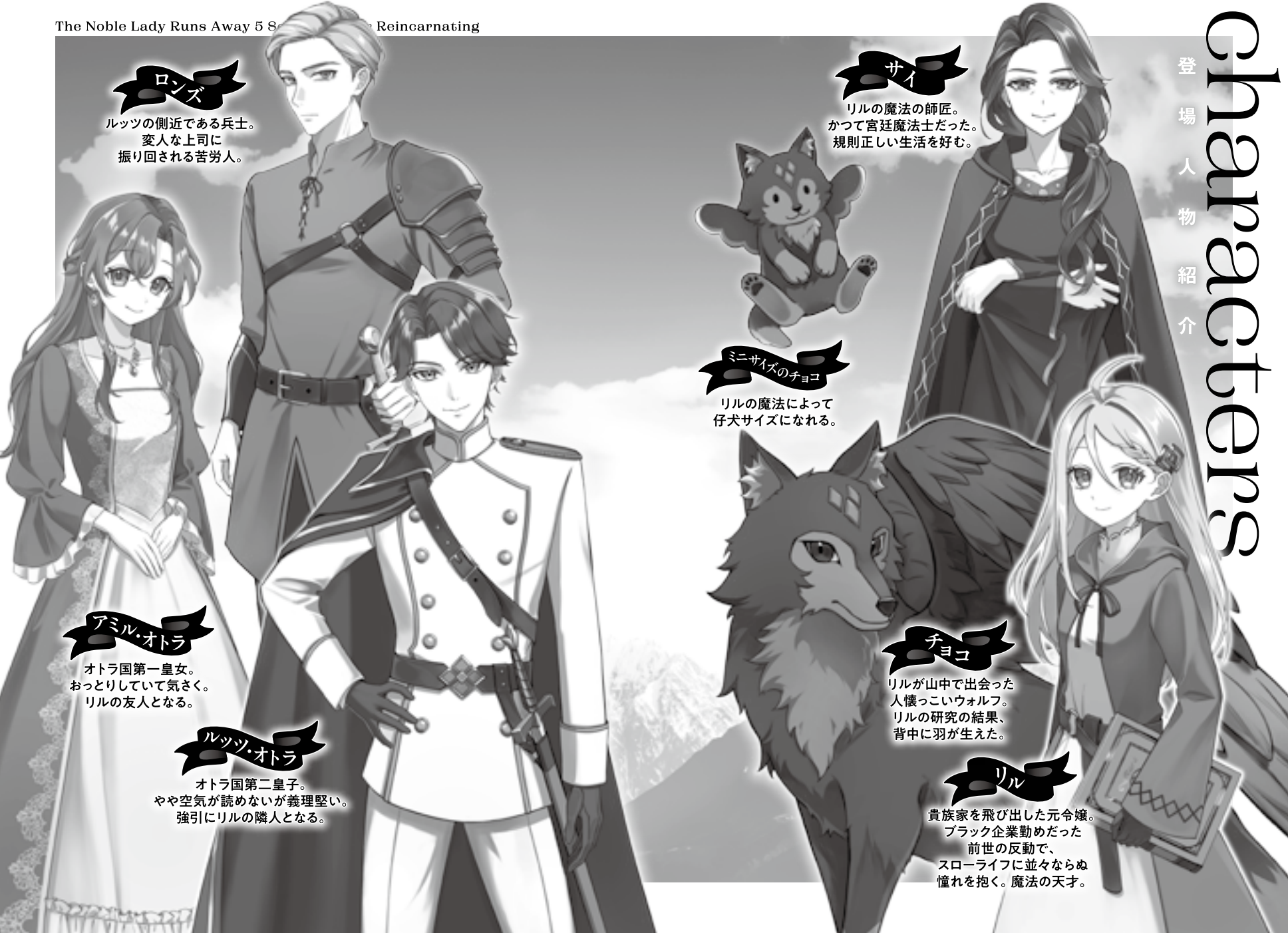
リル
貴族家を飛び出した元令嬢。
ブラック企業勤めだった
前世の反動で、
スローライフに並々ならぬ
憧れを抱く。魔法の天才。



アミル・オトラ
オトラ国第一皇女。
おっとりしていて気さく。
リルの友人となる。



ルッツ・オトラ
オトラ国第二皇子。
やや空気が読めないが義理堅い。
強引にリルの隣人となる。



第一章 家出します！

ある日リルは目を覚ました、前世の記憶とともに。自身の両手を見つめるとどう見ても子ども、体も子どもである。上半身を起こし、辺りを見渡す。どこかの部屋らしく、今座っているふかふかで柔らかなベッドは天蓋付きだ。家具も全て豪華な造りをしている。これは考えるまでもなく大金持ちの家である。

「髪の毛水色……」

どうやら転生した場所は日本ではないらしい。ベッドから下り窓から外を覗くと、濃いブルーの瞳が限界まで見開かれた。

「なんか空飛んでる人がいるんですけど!？」

——どうしようどうしようどうしよう!

日本どころか地球でもなかった。鞆を掴むとリルは勢いのまま部屋を飛び出し、走りに走って外へ出た。途中で「リルお嬢様!？」とメイドに呼ばれたが、今のリルに返事をしていない暇はない。

幸い誰にも捕まることなく、家の外に逃げることに成功した。屋敷の皆には申し訳ないが、気持ちが悪く着くまで家出をさせてもらうことにした。

うっすら思い出してきた今世の記憶のかぎりでは、病弱な母親は去年亡くなり、忙しい父親はほとんど屋敷に帰ってこない。たまに帰宅しても、リルをいない者として扱う。リルの世話はもっぱらメイドたちの仕事であった。

それならば、悲しむ者は少なからう。だが、建前上リルを逃がしたとしてメイドたちが罰を受けられるかもしれない。リルは振り返り、近くにあった葉っぱと尖った石を取り、苦戦しながら文字を書いた。

「ごめんなさい、リルは家出します。メイドさんたちは悪くないです。捜さないでください……と、OK」

問題はこれをどうやって屋敷に届けるかだ。たしか、家庭教師から魔法の基本は教えてもらっていた。このくらいの小さなものなら飛ばすことができるはず。

葉っぱに右手をかざし、イメージしながら力を送り込む。葉っぱがふわわりと浮き、真つすぐ、そして目にも留まらぬ速さで飛んでいった。リルはぺたんとその場に座り込む。

「わあお……もしかして、私、魔法の才能あったりする？」

思いがけない発見に、自分のことながら驚かされるのであった。

「どうしようかなあ」

街中を歩きながら、一軒の店の前で立ち止まる。店の窓に映った自分の姿はどう見ても十歳ぐら

いだった。こんな小さな子どもを泊めてくれる宿屋はないだろう。

そもそも、お金も持っていない。さすがに無謀すぎた。今からでも間に合う、屋敷に戻るのか。そう思っ止めた足をまた動かす。

せっかく家出をしたのだから、思い切り遊び回って飽きたら戻ればいい。その頃にはリルが存在しなかったことになっているかもしれないけれど。たしかあの家には年が離れた兄が一人いたはず。彼がいるかぎり家が潰れることはない。

そうであれば屋敷近くの街は避けた方が無難だ。しばらく歩いていくと、遠くに別の街が見えた。リルは小さな足で走り出した。

「あ」

街に入ったところで年老いた女性が座り込んでいた。横には重そうな荷物が置いてある。

「おばあさま、もしかして気分が悪いですか？」

「ああ、お嬢ちゃん。ちょっと腰を痛めてねえ。でも、大丈夫よ。近くに病院があるから」

女性が指差す方向に白い建物があった。あれが病院だろう。リルがしゃがんで荷物を手のひらで差し示す。

「もしよろしければ、お荷物を私がお持ちして病院まで一緒に行きたいのですが」
すると、女性が眼鏡の奥の丸い目をさらに真丸にさせた。

「まあ、まあまあ、小さいのにしっかりしていること。じゃあ、お言葉に甘えようかね。どうもあ

りがとう」

「いえ、ちよっと散歩中で時間があるので」

ちよっと散歩どころか大規模な家出なのだが、それを誰かに言うつもりはない。

リルが女性に手を貸して起こし、荷物を右手に持った。見た目どおりの重さで、子どもには少々きついが、持つと言った手前弱音を吐くわけにはいかない。平気な顔をして女性と一緒にゆっくり歩き出す。

「もし辛つらくなったら休むので言ってください」

「優しいねえ」

女性の目には、子どもが一生懸命お手伝いをしているように見えているだろう。実際そうだ。しかし、中身はアラサーの女性。困っている人を助けたことは数えきれない程ある。これも日常のありふれた一幕だった。

病院に着き、受付を済ませる。女性が椅子に座ったところで、リルがお辞儀しげをした。

「それでは、私はこれで。すぐ良くなるようお祈りしています」

「本当にありがとうございます。そうだ、これを」

そう言っ、女性が袋から小銭をいくつか取り出してリルに握らせた。リルが首を横に振る。

「私はお手伝いしたかったからしただけなので、受け取れません」

「あらまあ、心が天使のように清らかなのね。ちよっとしたお小遣いだと思って、お菓子でも買っ

てちようだい」

「でも」

「おばあちゃんのがままに付き合ってくれたら嬉しいわ。ね？」

そっと小銭の入っている手を握られて、リルはもう何も言えなくなった。

「では、頂きます。ありがとうございます」

「お礼を言うのはこちらの方だわ。いつかまた会えたら、改めてお礼させてね」

「またお会いできたら嬉しいです」

ペコペコ頭を下げつつ女性と別れ、病院を後にする。少し歩いてから、リルが右手を開いた。中には銀色に光る硬貨が五枚あった。

「これでいくらなんだろう。五枚だから五百円くらいかな」

屋敷ではお小遣いをもらっていないかったので、いまいち硬貨の価値が分からない。硬貨には

「一」と書かれているのが読み取れるので、リルはそれを百円と仮定して納得した。

「五百円ならお小遣いとしてちようどいいかな？ お腹空いたときに使わせてもらおう」

この世界で買い物をするのももちろん、お金を持つこと自体初めてだ。そもそも、屋敷の外に出ることも年に数回あるかないかだった。母は元々病弱で外出することなど皆無に等しく、数日に一回医者に来ては診察という日々だった。父に至っては話しかけられた記憶すらほぼない。

「というか、私の存在知ってるか怪しいくらいだったよ」

とぼとぼ歩いていたら、宿らしき建物を見つけた。自分の手を見遣る。子どもの手だ。とうてい一人では無理だろう。しかし、何か奇跡が起きて宿に泊まれるならそちらの方がいい。

「値段だけ確認しよう」

今の状況では駄目なことは理解している。しかし、この世界の価格設定を知っておくに越したことはない。リルは宿泊客らしき男の後ろについて宿屋の中に入っただけだった。

宿屋の受付にいる男性が宿泊客の男性に鍵を渡す。続いてリルを見て、にこやかに話しかけてきた。

「いらつしやいませ。どなたかのご家族ですか？」

「いえ、こちらの価格表を拝見したくて参りました」

「……そうですか。価格表はこちらになります」

一瞬の間があったが、男性は価格表をリルに見せてくれた。部屋のグレードらしきものの右隣に価格が書かれている。一番安い部屋で三千レニだった。

「あの、私一人でも泊れますか？」

リルの問いに男性が眉尻を下げる。

「ごめんなさい。十六歳以上でないとお一人では宿泊できない決まりになっています」

「そうですか。分かりました、ありがとうございます」

価格表を返して宿屋を出る。少々残念だが、想定内だ。

宿屋が駄目だと分かったら、もうこの街に用はない。さっさとここを出て屋敷からできるだけ離れた場所まで行こう。リルは前を向いて歩き出した。

「お嬢ちゃん」

街の門までもうすぐというところで声をかけられた。そちらを向くと出店の女店主が手招きをしている。リルが自分の顔を指差せば額かれたので、とことこ出店に近付いた。

「今日から新商品のお菓子が入っているの。お一つ、いかがかしら？」

「どんなお菓子ですか？」

「これよ。口に入れて舐めると溶ける、不思議なお菓子なの」

店主が籠に入れられた、色とりどりのビー玉に似たお菓子を見せる。リルは興味深くそれを眺めた。

—— 飴、かな？

「いくらですか？」

「一つ五十レニよ。お金は持っているかしら？」

「はい。二つください」

先ほどお礼として手渡された硬貨を一枚手に取り、店主に差し出す。足りるかドキドキしていたら、店主が袋に入れた飴玉二つと、おつりをリルの手のひらに置いた。

「九百レニのお返しです。ありがとうございます、またどうぞ」

「ありがとうございます」

ぺこりとお辞儀し、出店から離れる。そして門を出たリルの足は、どんどん速度を上げ、やがて走り出すまでになった。

「良かった、足りた。初めてのおつかい。あの硬貨って一枚千レニもあったんだ……もしかしておばあさんって大金持ちだったりして」

まだ心臓の鼓動が速い。それでもリルの足は止まらない。

しばらくして、気持ちが悪く落ちてきたリルは大きな木に寄りかかって休憩した。肩を上下に動かして息を整える。

「お金、大事にしないと」

基本的に人里離れた場所で自給自足をするのが目標だが、金はあるに越したことはない。思っていた以上の大金が入ったポケットに手を当てる。

「お金を持ったのも、買い物したのも初めて。お父様は何も許してくれなかったから」

——というより、屋敷だけが私の人生だった。

自分がどのような扱いを受けていたかと、名字がノーバーということくらいしか思い出せていないが、これ以上思い出したところで余計なため息が増えるだけだろう。

リルはその場に座り、買ったばかりの飴を一つ、口に入れる。わたあめみたいな味がした。

どこかで食べたことのある、甘い香りが鼻をくすぐる。前世のお祭りか、はたまた今世の思い

出か。

「そういえば、お母様が元気だった時、一度だけ一緒に外に出たことがあった」

まだリルが五歳になるかならないかの頃、母は週に一日くらいは具合の良い日があった。そのうちの一日をリルと一緒に過ごしてくれたのだ。

街ではささやかなお祭りが開催されており、二人で出店を一つ一つ見て回った。母はリルに焼き菓子を買ってくれ、その場で食べることができず、袋を両手でしっかり持って屋敷に帰った。

玄関の扉を開けた先には珍しく父の姿があった。父と顔を合わせるのはどれくらい振りだっただろう。リルが口を開く前に、父は母の背中に手を当てた。

『体が冷える。早く部屋に行って寝なさい』

『はい。リル、今日は楽しかったわ。ありがとう』

『リルも楽しかったです』

リルの母への返事も終わらないうちに、父は母を連れて行ってしまった。その間、父と目が合うことはなかった。やはり、父の目にいつもリルは映っていない。父の声を聞いたのは、母がいる時だけだった。

「お母様と似ているところもあるのに」

水色の髪の毛は母譲りだ。母を大切にしていたのであれば、自分のことも大切にしてくれてもいいのに。そう思ったこともあった。だんだんと記憶がよみがえってくるが、そのどれもが悲しいも

のであった。

「それでも、お母様がいた頃は良かったな。お母様は優しくかったから」

父の態度も、母の優しさであやふやにできていた。それも一年前までの話だ。母が病気で亡くなったからは、父の声すら聞かなくなった。こちらから歩み寄ることもしない。物心つく頃にはそうであったような気がするの、おそらくそれまでに諦めの日が来ていたのだろう。

「前世は家族仲が良かったから、親に冷たくされるのはこたえる」

しかし、それも昔の話。今のリルは自由だ。いるのにいない扱いはされないし、貴族という目で見られることもない。

「そうだ。ドレスだと目立つから、一枚脱いでおう」

周りを見渡し、誰もいないことを確認する。木陰でドレスを脱ぎ、シンプルなワンピース姿になった。まだこの下にインナーを着ているので、これだけでも服として成り立つ。ドレスを鞆の中にぎゅうぎゅうに押し込む。そして、綺麗に結っていた髪の毛を解いた。

「これなら貴族の娘だとは思われないでしょう」

あまり考えたくないが、裕福そうな子どもが一人で歩いていたら、金目当てで近づいてくる輩がいるかもしれない。かといって、貴族と思われなければ誘拐されないとはいいい切れない。

「そのときは魔法で追い払おう」

——呪文とかまだよく思い出せてないけど。

「宿に泊まれないって分かったから、さっさと寝られる場所を探さなくちゃ」

こんな子どもが野宿などもつてのほかだが、この状況だ。リルは遠くに見える山を真っすぐ目指した。

途中、人気のなくなつたところではたと立ち止まる。記憶を取り戻した直後に、空を飛んでいる人間を見かけた。ということは、魔法が使える自分にも飛べる可能性があるということだ。

「飛べ、飛べ飛べ」

試しに唱えてみても何も起きない。呪文が違うか、やり方が違うのか。今のリルにはさっぱり分からない。

「魔法の先生がいろいろ教えてくれたはず……そろそろ思い出していかないと……」

街の方を振り返る。あそこまで戻れば、魔法に関する本が売られているかもしれない。しかし、あまり人目に付くところにいるのは得策ではない。リルは諦めて山まで自分の足で歩いていった。

太陽が昼過ぎを伝える頃、ようやく山の麓にたどり着いた。山頂が全く見えない大きな山だ。ここまで来れば、しばらく誰も追ってこないはず。そもそも、幼い貴族の娘が一人きりで山登りをするとはいえないだろう。安心したリルは柔らかな草むらの上に寝転んだ。

「よし、寝よう」

前世では沢山働いた。それはもう夜中まで。せっかかくこうして生まれ変わったのなら、今度はの

んびり過ごしたい。できれば一日寝ていたい。全ての時間を休息にあてたい。欲望の赴くまま、リルは目を閉じた。

ぐうう。

「……はっ」

自分の腹の音で目を覚ました。辺りは陽が落ちかかっている。いったいどれだけ寝ていたのだろう。しかし、まだ寝足りない。

もう一度寝ようか迷っていたら、近くから足音が聞こえた。ゆっくりそちらへ顔を向けると大きな狼がいた。リルは死を悟った。

——短い人生だったな。

仰向けになり胸元で手を合わせて目を瞑る。痛みはいつこうにやってこなかった。その代わり、何かが倒れる音がした。

「これ、お嬢ちゃん。怪我は無いかい？」

いきなり人の声が降ってきて、さすがのリルも目を開けた。長い青髪を一つに束ねた中年の女性がこちらを覗き込んでいる。

「怪我はありません」

上半身を起こして女性の横を見ると、先ほどの狼がばたりと倒れていた。女性に向かって頭を下

げる。

「助けていただきありがとうございます」

「おや、礼儀正しいね」

女性がにんまりと笑って言う。

「私はサイ。名前を聞いても？」

「名前は……リルです」

「愛らしい名前だねえ」

貴族のため名字が存在するが、自分の身分を知らせるのは得策ではないため、名前だけ伝えることにした。サイがじろじろとリルを観察する。リルが手を上げた。

「じゃあ、そろそろ失礼します」

「待って」

「なんですか？」

きよんと首を傾げるリルに、サイが長い息を吐いた。

「そのウオルフを見て分かるとおり、この山には魔物がいる。幼子一人では危険だぞ。保護者はどこだい」

「いません」

——ここには。

本当は父親がいる。顔はよく思い出せないが兄もいる。しかし、逃げてきた身なのでいらないも同然だ。

「一人かい。ふむ、仕方ないね。それなら私の家に来なさい」

「え……嫌です」

「何故だい」

「めんど、申し訳ないから」

「今面倒って言ったね!？」

呆れた顔をされたが、リルはいたって真剣だ。神妙に頷くと、サイの表情がさらに崩れた。

「面倒だろうがなんだろうが、小さな子どもを一人置いていくわけにはいかない。私と一緒に来てもらおうよ」

「ええ……」

右手を掴まれリルは眉間に皺を寄せるが、ウォルフを倒した彼女に抵抗したところで敵うはずはない。がつくりと肩を落とし、仕方なくついていく。

——お手伝いとか、仕事とかするのかなあ。

ずんずん進む彼女の背中を見ながら、リルは一日何時間寝られるかだけを考えて。



「これ、リル。起きなさい」

あれから一か月が経った。

サイに起こされたリルは二度寝をするため、再度毛布に顔を埋めた。ちなみに、出自が貴族で家族がいるということはバレずに済み、未だ迷子のリルとしてこの家に置いてくれている。怪しい子どもなどすぐに追い出せばいいものを、サイは人一倍親切な人間らしい。

一日中寝ていたという希望は初日に却下され、今日も朝七時に起こされた。本来は六時の約束だったが、リルがあまりに熱望するため、仕方なくサイは七時で妥協した。

「この世界にも時計はあるんだね……無ければ、みんな適当に生きてても許されそうなのに」

サイの家はリルがいた山の中にあり、一人暮らしをしているという。現役時代は宮廷魔法士をしていたらしいが、本当のところは分からない。とりあえず、やることのないリルはサイの手伝いをして一日を過ごしている。

ちなみに、魔法士とは文字どおり魔法を扱う職業の名前である。この国、オトラ国はもちろん、世界中を見ても魔法を使える人間は少ないので、魔法士になれば仕事は沢山あるらしい。仕事と言われたリルはその辺りで話を真面目に聞くことを止めた。

「顔を洗っておいで」

「め」

「面倒でもやる」

「はい」

とぼとぼ井戸に向かう。ついこの間暦が三月になったと教えられた。さほど寒さは感じないが、それでも井戸水は冷たい。はつきり言って洗いたくない。

井戸の中を覗くと、自分の顔がゆらゆら揺れていた。

水色の髪に深い青の瞳。これが今の自分だ。せいぜい十歳、鼻屑目に見て十一歳といったところだろう。前世と比べて随分小さくなってしまった。

「冷たそう」

目の前にある水がよく冷えていそうで、汲むのを躊躇する。リルは辺りを注意深く見回し、サイがないことを確認して右手人差し指を水に差し出した。

「シユエイ」

すると、水が丸い形になってふよふよと浮き、目を瞑ったリルの前でパチンと割れた。顔に付いたそれを両手でこする。

「はあ、手は冷たくないけど顔はちょっと冷たかった。今度はお湯にする魔法を覚えよう」
振り向いたところで玄関から出てきたサイと目が合った。

「ええと」

「どこ行くんだい」

サイに背を向けたところで声をかけられる。リルは気まずそうに顔だけ振り返った。

「薪割りでもしようかと」

「家に薪は無いよ」

「そうですか」

もう思いつく言い訳はない。観念して立っていると、サイが近づき尋ねた。

「リル。今、魔法を使ったね」

「そうですよ」

「そうだよ。私は教えたことがないのに」

「ごめんなさい」

リルはぺこりと九十度のお辞儀をする。サイがリルのつむじを見つめる。

「魔法を勉強したことは？」

「少し」

「少し？ じゃあ、そこで水の操り方を習ったということかい？」

「はい、まあ」

——隠れて魔法を使うなんて勝手なことしたから追い出されるかも。でも、元々一人で生きるつもりだったからいいや。

「初心者杖も無しでねえ……」

腕組みをして考え込んでいたサイがそう呟く。なんとなく嫌な予感がする。

「素晴らしい」

「えっ」

がっしり肩を掴まれる。女性とは思えない強い力だ。リルはすぐさま逃げ出したくなった。

「いや、さっきのは偶然できたというか」

「偶然でいきなりできるはずがない。リルには才能がある。私の弟子になりなさい」

「めん、嫌です」

「その年でそのくらいできるなら宮廷魔法士にもなれる」

リルの拒否はなかったことにされ、望まず魔法士サイの弟子となってしまうた。

「まず、魔法についてだが——」

「あ、そういうの結構です」

「商人からのいらぬ商品を断るみたいに言うな」

翌日、何故だかやる気のあるサイがさっそく魔法座学を開こうとしたら、リルが手のひらに向けて断った。

「私、魔法士になりたいわけじゃないです」

「まったくこの子は」

サイが両手を上げて降参する。

「とりあえず、今できる魔法は何だい」

問われたリルはおもむろに立ち上がり、両手人差し指を空に向けた。右手には炎、左手には水が浮き上がる。

「こりゃ驚いた。詠唱なしでもできるのか」

「師匠だっしてするじゃないですか」

「それは私が高等魔法士だからだ」

言われてみれば、屋敷にいた頃魔法学の講義を何度か受けていたが、教師はいつも詠唱していた。詠唱無しは一般的ではないらしい。リルがぼんやり聞き流していると、サイが手のひらから透き通った赤い精霊を出してみせた。

「これは火の精霊だ。攻撃するにはどうする」

「それ、生きていますか？」

サイは首を横に振って答えた。

「いや、私が作り出した幻だ」

「なるほど。それなら遠慮なく」

右手の人差し指を精霊に向ける。水が勢いよく伸びて精霊を包み込み、あっという間に精霊は消し飛んだ。

「火には水です」

「なんとまあ」

サイは驚きの声を上げた。リルに生活魔法を見せたことはあっても、攻撃する方法を教えたことはなかったからだ。

——少しの勉強では攻撃魔法まで習っていない可能性の方が高い。リルには高等魔法士になる資質が十分にある。いや、もしかしたらそれ以上の。

「リル」

「はい」

「今、一番に望むものはなんだ」

「寝ることです」

いつもどおりの答えに苦笑する。サイは続けた。

「よし、私が出す魔法学の課題をやりさえすれば、あとは好きなことをして過ごしてよい。それならやるか？」

「やります」

リルは即答した。

「自由に書き込んでいいから」

「はい」

サイから魔法学の基本が書かれた本を渡される。幸い、リルはこの世界の文字を読むことができ。リルは勉強と引き換えに睡眠を手に入れた。

「ではさっそく」

「これこれ」

ベッドに向かうリルをサイが引き止める。

「勉強はどうした」

「ベッドでしようかと」

「寝る気だろう」

「そんなことはありません」

リルは曇りなき眼で見つめるが、サイには全く効かなかった。

「机でやりなさい」

「ちえッ」

渋谷椅子に座る。ここで拒否して寝るよりも、言うことを聞いて自由な時間をもらう方が後々得だ。リルは基本書の目次を開いた。

「そういえば文字が読めるんだね。大したもんだ」

「読めない人もいるんですか？」

「学校に行っていない子どもたちもいるから」

本を読みながら他愛ない話をする。

そういうえば、ここに来てからたいした会話をしていなかった。サイも一人でいたリルに気を遣ってか何も聞かなかった。

しかもここは山の中である。リルは家出以降、サイ以外の人と会ったこともない。今初めて、自分たち二人以外の人間が山の外にいることを意識した。

「魔法を試したいので、外に行ってもいいですか？」

「おや、もう読むのは止めたのかい」

「だいたい分かったので」

指の使い方、詠唱のコツは読んだ。あとは実践をこなしながら学ぶことにした。リルは立ち上がり、本を片手に外へと出ていった。

「さてと」

家から歩いてしばらく経ったところでリルが立ち止まる。森の中でサイの声も届かない。特に道具は持ってきていない。あるのは本のみだ。

「炎と水、風は出せる。あとは雷と……複数混ぜることも可能なんだ。明日からお湯を出して顔を洗おう」

試しに水に炎を混ぜてみると、お湯が出来上がった。触れてみたら少し熱い。

「温度調節は必要、と」

本にあとで見直す事項を書き込む。

次のページを開いてみるが、そこでリルの手が止まった。

「そろそろ休もうかな」

草むらに寝転がったところで、遠くから足音が聞こえた。グルルと鳴る喉の音とともに。

——あれ、前にもこんな音を聞いたことが。

顔をそちらに向けると、体長二メートル程のウオルフと目が合った。

「わあ」

異世界に疎いリルでも理解できる。これは生命のピンチだ。

「どうしたものか」

のんびり生きる以外望むことはないが、かといって早く死にたいわけではない。痛いのも嫌だ。リルは起き上がり、魔法書を開いた。

「試してみよう」

右手人差し指を縦に振る。

「イェン」

炎が真っすぐ伸び、ウオルフに襲いかかった。ウオルフが横に飛びのく。

「あれ、動物は火が苦手だから逃げたのに」

計算が狂ってしまった。これではやられてしまう。リルは態勢を立て直した。
「じゃあ、一気にかかせてもらうね」

両手を動かし、水と風を起こす。そして両手を組んで魔法を融合させた。ごうごうと大きな音を立てて水が回転する。ウォルフがリルに向かって牙を剥いた。

「勝負」

風により威力が増した水をウォルフに撃つ。

「ギャオッ！」

恐ろしい叫び声を上げてウォルフが後方に飛ばされた。地面に倒れたウォルフを遠目に確認して、リルが汗を拭う。

「よし、やったか」

近づいてウォルフの状態を確認することはせず、その場を離れた。

「この山って意外と危ないのかも。そういうえば、魔物が出るとか言っていたような」

そうと分かれば、今後のために攻撃魔法を覚えておいた方が良さそうだ。そんなことを考えていたら、遠くにサイが見えた。どうやら心配で見に来たらしい。

ひらひら手を振ってみせると、サイが帰っていった。ウォルフの襲撃は自分でも予想外だったが、撃退できるだけの力量を見せたのでひとまず安心してもらえただろう。これで一人ゆっくり進められる。

「ん？」

何かの気配がして振り向く。先ほどのウォルフがいた。

「何、どうしたの。また戦う？」

じっと見つめる。ウォルフがゆっくり近づいてきた。

——敵意は感じない。

何をしたのか観察していると、あと五メートル程のところまでウォルフがごろんと腹を見せて寝転がった。

「わっ」

思わず声を上げる。

腹を上に向けたということは、こちらに服従したと捉えていいのだろうか。うずうずする気持ちを抑えられず、リルはウォルフに近寄った。

「あのく……『もふ』ってしてもよろしいでしょうか」

ウォルフはこちらを見るばかりで特に返事はない。それはそうだ。人とウォルフでは言語が違う。リルはそつとウォルフに触れた。

「もし、嫌だったら嫌がって。すぐ止めるから」

両手をウォルフの腹に乗せ、顔をそこに少しだけ埋める。意外な柔らかさに驚き、リルは大いに喜んだ。

「自分が乗れるくらいの大型犬と遊ぶの夢だったんだ。こんなところで叶うなんて」
リルは思いがけない癒しにしばし浸った。

「はあ……」

そのまま寝てしまつたらしく、目を覚ましたら陽が傾いていた。ウオルフはというと、リルに枕にされながら寝ていた。

「もふもふさせてくれてありがとう」

すっかり懐いたウオルフを可愛く思う。できるならこのまま飼いたいところだ。しかし、リルも居候の身である。

「許してくれるかなあ」

「グウ」

「わ、起きた」

ウオルフが起き上がる。四つん這いでもかなりの高さがある。後ろ足だけで立つたら相当な迫力だろう。

「ウオルフ、うちの子になる？」

「ギャオツ」

意味が分かっているのかいないのか、ウオルフが元気に鳴いた。

「あはは」

大きな舌で顔をべろりと舐められる。いちおう手加減はしてくれているらしい。伏せをしたので、ありがたく背中に乗せてもらい家を目指した。

数分で家が見え、外にいたサイが目を丸くして一人と一匹を見ていた。

「ただいま」

「なんだい、それは」

「ウオルフです」

「そういうことじゃない」

本来人に慣れることのない魔物を連れ帰つたため、やはり良い顔はされなかった。リルはできるかぎりの子どもらしい声でおねだりをした。

「友だちになつたんです。一緒に住んでもいいですか？」

「ウオルフと友だちに？」

「はい。お願いします。世話は全部私がします」

ウオルフを抱きしめながら懇願する。サイがその様子を見て、一つ頷いた。

「よし、全部リルがするんだよ。ただし、大きすぎるから住むのは庭で。分かったね」

「ありがとうございます！」

睡眠だけが楽しみの毎日に新たな楽しみが増えた。

「これからよろしく」

「うーん……」

無事に許可をとった後、リルはウォルフを前に庭で悩んでいた。

「ウォルフは狼型魔物の総称だから、名前があるよね」

前世の子どもの頃は実家に犬がいたが、付けたのは親だったし名前は太郎だった。

「この世界の言葉は横文字みたいだから、漢字じゃない方がいい。毛の色は黒、いや光に当たるとこげ茶かな」

頭を撫でる手にすり寄ってくる。すっかり飼い犬だ。リルとしてはいい友人になりたいのだが、ウォルフはどう思っているだろうか。

「よし、チョコにしよう」

「チョコとは？」

いつの間にか隣にいたサイが疑問を投げかける。

「お菓子の名前です」

「リルがいた国にはあったのかい」

「はい」

気に入ったのか、チョコが高く細い声を上げた。



何やらむずむずした気持ちで心をくすぐる。これが母性というものか。

「しかし、リルは珍しい菓子を知っていたり、どこことなく気品もあるね。まるで貴族だ」

「いやいや、私なんてそんな。その辺で生まれた一般市民です」

「そうかね」

焦ることを言われて必死に取り繕う。貴族だとバレたら、すぐにも家を捜し出されて戻されるだろう。あのような窮屈な場所に帰るのは絶対避けたい。しかも、今日から魔物と友人になった。さらに家に帰れなくなった。

チヨコはリルに出来た初めての友人だ。今世自体、リルにとって余生みたいなものなので、友人を作る気はなかったが。サイがリルとチヨコを見て言う。

「これで少しは外に出る気になったかい。いつも寝てばかりだからねえ」

「いや、それとこれとは別で」

リルの信念は変わらなかった。

「あ」

翌朝、目が覚めたリルは、体を起こして窓の外を見遣る。太陽の位置が昨日の朝とやや違う。どうやら寝坊したらしい。いつもより遅く起きたが、サイが起こしに来た形跡が無いことに気が付いた。

「そういえば、ちゃんと勉強すれば好きにしていって言うってたっけ」

言われた記憶はあるものの、本当にそのとおりにしてくれとは思ってもみなかった。屋敷にいた頃は一日の流れが決められ、外出もよほどのことがないかぎり許されず、自由とは正反対の生活をしてきた。こうも制限なく自由を与えられるのはとても新鮮で、リルは嬉しさのあまり叫びそうになってしまった。

「じゃあ、もうひと眠り……は、さすがに無理だよね」

「ギョオ」

「おはよ、チヨコ」

庭で寝ていたはずのチヨコがリルの顔にすり寄る。開けっ放した窓から無理やり入ってきたのだろうか。もふもふは夢じゃなかった。リルが恐る恐る両腕を広げると、チヨコが勢いよく飛び込んできた。思う存分抱きしめ、柔らかな毛に顔を埋める。

そうこうしていると、サイが様子を見にやってきた。

「これ、リル。チヨコは野生だったんだ。顔が汚れるぞ。まったく、庭にいるように言ったのに、このウォルフは」

「あ、おはようございます。大丈夫です、変な臭いしないし。部屋の中に入れたのはすみません」

「ギョウ……」

気にしないリルにサイが息を吐く。

「仕方ない。一緒に水浴びでもしておいで」

「分かりました。綺麗になったら部屋に入れて大丈夫ですか？」

「たまにならね」

「やった！」

チョコの毛から顔を離し、リルがベッドからぴよんと下りる。チョコは大人しくリルの後をついていった。サイがそちらを向いて見送る。

「チョコの方が気を遣っている感じだね。リルにはもっと規則正しい生活を送ってもらいたいもんだが、はてさて困った」

サイは荷物がほとんど無い部屋を眺めて呟いた。

一方、上機嫌でチョコと家を出たリルが言う。

「さあ、水浴びをしようか。言われてみれば、昨日お風呂に入ってない」

家に風呂はあるけれども、チョコと一緒に入れる大きさではない。かといって水浴びとなると、暖かい気温でも少々寒いだらう。リルが右手に力を込める。

「うん。こういうときの魔法だよ」

数分歩いて小川に着くと、リルが魔法で水を吸い上げ、上空に丸い水溜まりを作った。チョコが吠えながら水溜まりを威嚇する。

「ギヤオギヤオツ」

「あはは、大丈夫。水浴びをするだけだよ。水っていうかお湯だけだね」

水溜まりに炎魔法を当て、温度を調節する。試しにひとすくい分落としてみる。温いお湯が肩にかかった。チョコがふるふる体を震わせる。

「今からお湯を落とすよ。準備はいい？」

「ガウツ」

チョコが足に力を入れ、お湯が落とされるのを待つ。どうやら、ウォルフは思っている以上に頭が良いらしい。リルが感心しながら、お湯溜まりを下に落とした。

「きゃあああ！ あはは！」

「ギヤオオン！」

ザバアアアツ。

リルとチョコ、そして辺り一面が濡れる。それが面白くて、リルは腹を抱えて笑った。

「一回じゃ綺麗にならないから、もう一回ね」

もう一回と言いつつ、結局五回も繰り返してようやく水浴びを終了させた。濡れた体と服を風魔法でしっかり乾かしてから家に戻る。

「おかえり。綺麗になったかい」

「はい。きちんと水浴びしてきました」

「しっかり乾いているね。いい子だ」

ポンと頭に手を置かれ、リルはそのなごりを両手でさすった。母が亡くなってから久しぶりに頭を撫でられた。サイが顎で家を指し示す。

「もう昼近くになる。昼食にするよ」

「はい」

言われてみれば腹が減っている。リルはサイに続いて家に入り、キッチンで昼食作りの手伝いをした。

「子どもの割には相変わらず手際が良い」

「ありがとうございます。家の手伝いをしたことがあるだけです」

本当は今世で料理をしたことなど一度もない。前世でならば、一人暮らしだったのでさんざん料理をした。とはいえ、そのほとんどが限界飯で、ご飯は炊かずにレンジで温めるパックご飯、フライパンで焼いた肉をパックご飯の上に乗せて、すでにカットされている千切りキャベツを投入して食べるのが定番だった。それすら面倒なときは納豆卵かけご飯で終了していた。

それだけ仕事が激務だったのだ。会社の全員が全員そうだったのかはもはや覚えていない。とにかく自分は激務だった。十八時が定時だったが、そこからが本番のようなものだった。

十八時を過ぎて新規の仕事を持つてくる社員がいたり、間に合わないからと言って、顔くらいしか知らないのに十九時に仕事を押しつけてくる社員がいたりした。

そして前世の自分も断ればいいのに、一度引き受けるとそれが当たり前になってしまい、断ったら何を言われるか心配で、全部笑顔で済ませていた。

まずかった。絶対してはいけなかった。それなのに続けてしまった。体を壊すのは必然だったのだ。

——今は幸せだなあ。

世話を焼いてくれる人がいて、チョコという相棒が出来て。リルは張り切ってコウと呼ばれる魔物の肉を焼いた。

「おっと。危ないよ」

リルの後ろでサイが何かをし始めたかと思うと、髪の毛をふいに引っ張られた。どうやら、髪の毛を結んでくれたらしい。

「火を使っているから、長い髪はまとめておくんだよ」

「ありがとうございます」

サイはぶっきらぼうだがとても優しい。お互いすれ違いでしかなかった父との生活とはまるで逆だ。しかし、リルの目標はあくまでも一人でのんびり暮らすこと。サイだって、いきなりやってきた素性の知れぬ子どもとの暮らしは煩わしいこともあるだろう。

——いつか、切りの良いところで独り立ちしよう。

サイにとってリルは小さな子どもでしかないため、すぐには難しいかもしれない。しかし魔法を

覚え、一人でも大丈夫だと思ってもらえれば一人暮らしも許されるはず。

「出来ました」

「うん、良い焼き色だ。じゃあ、一緒に食べよう」

「食べたからお昼寝していいですか？」

「せめて洗濯してからにきな」

昼食後、魔法で時短洗濯をしたリルは夕方まで三時間たっぷり昼寝をした。



「リル」

庭でチヨコと魔法対決をしていたリルがサイのもとに駆け寄る。

「なんですか」

サイがリルの姿をまじまじと見つめた。

「もう十四歳か」

「はい」

リルがサイに拾われてから四年が経過した。十四という数字は、出会った当初リル自身が十歳と伝えたからだ。適当に言ったので、もしかしたら本当は十五歳かもしれないが、それはリルにとっ

て重要なことではなかった。

結局、なんだかんだ山を出ず四年も一緒に過ごしてしまった。割と居心地が好いのが悪い。

「しかしまあ、立派になったもんだ」

リルはこの四年間で大いに成長した。見た目はもちろん、特筆すべきは魔法についてだ。

渡された魔法の基本書は一週間であつたという間にマスター。それからはサイが直接教えたが、一度教えればすぐに実行でき、今では独自の魔法を編み出している。

ちなみに、この四年でサイ以外の人間に会うことは一度もなかった。

不思議に思つて山を調べたところ、どうも山の中腹辺りから頂上まで結界が張られているようだった。リルが来た時には無かったので、少なくとも、この四年以内に作られたものだということが分かる。

どういう意図があつて結界を張っているのかは聞いていないため知らないが、幸か不幸か、それのおかげで屋敷の人間にリルの居場所がバレることはなかった。もしかしたら、捜索を早々に諦めてリルは存在しなかったことにされているかもしれない。それならそれで良しとする。

「チヨコも立派になったねえ」

「えへへ」

「半分呆れているけどね」

リルの横にいるチヨコは以前よりさらに大きくなり、背中には羽が生えている。これは毛の中に

収納できる優れたものだ。

つまり空を飛ぶことができるのだが、通常ウォルフは飛べない。リルが魔法学を応用し、チョコを進化させたのだ。もちろん、チョコの同意を得てだが。

長年一緒にいたため、頭の良いチョコはすっかりリルの言うことが分かるようになった。頷き方や鳴き方で意思疎通も可能である。

「もう私を超えたんじゃないか」

「そんなことないです」

これは謙遜けんそんというより、リルに地位や格付けへの興味が一切ないことを示していた。

リルは魔法士として天才的だが、向上心がまるでない。師匠を超えたいと思つたこともない。サイはあれこれ試してみたものの、リルの心が上を向くことはなかった。

そこでサイは強硬手段に出た。

「宮廷魔法士にならないかい」

「嫌です」

リルは食い気味に拒否をした。予想どおりの返答にサイががっくり肩を落とす。

「私はこれからも好きな時に寝る生活をしたいので」

「これこれ」

リルはチョコに乗り、サイのもとから逃げる。サイは壁に掛けていた剣を手に取り、さながら

サーフィンのようにそれに飛び乗るとリルを追いかけた。

「リル、話を聞きなさい！」

「嫌です」

困ったことになった。非常に困ったことになった。

この四年、問題も起きず、のんびりまったりスローライフを送ってきた。もちろん魔法の勉強はあったが、あとは本当に自由にさせてくれたので、チョコと遊んで寝転んで惰眠だみんを貪むさぼる日々だった。それなのに、ここに来て宮廷魔法士だなんて。

「ぜったい嫌だ。朝から夜まで働くなんて変態のすることだよ」

四年間、人間に会わなかった。遊び相手はチョコや山にいる魔物だった。生活は自給自足で、野菜の種類が少ないことがやや不満だったが、それが人里に下りる理由にはならない。とにかくリルは自身のスローライフを守るべく、サイから逃げまくった。

「うわ、もう追いついてきた。さすが師匠」

しかし、大人しく捕まるつもりは全くない。リルは右手で大きく円を描く。

「空間移動」

空中に靄もろが現れ、チョコごとそこへ突っ込む。リルたちの姿は跡形もなく消えた。

「くそッ、空間魔法なんていつの間にか覚えたんだ」

サイが悔しそうに呟く。

「はあ、危なかった」

リルは元いた家の庭にいた。チョコを収納魔法の応用で小さくさせて自室に入る。そして、大慌てで鞆に自分の服などを詰め始めた。

「空間魔法は行ったことがある場所にしか行けないのが不便だな」

鞆を持ち、自室を出る。そして、リビングのテーブルに紙を置いて外に出た。紙には「お世話になりました。独り立ちします」と書いた。

「うーん、見える範囲にはいないけど、いつ戻ってくるか分からないし、もう行こう」

辺りを見回してみるが、人がいる気配はない。リルはチョコを肩に乗せたまま、風魔法を体にかけて自身を宙に浮かせた。

「師匠、お世話になりました。この御恩は一生忘れません。でも、宮廷魔法士は勘弁！」

サイがいるであろう方向にお辞儀をし、リルは一目散に飛んでいった。

「さて、どこに行こう。山を出たことがないから、どこに行けばいいのかさっぱり」

とりあえず、四年前まで住んでいた家のある方角とは反対方向に逃げる。山を越えると、森が見えた。集落らしきものは無い。この辺りは辺境で、人が住んでいないのかもしれない。

「どうせなら、次住むところも辺境の山がいいな」

しばらく行くと、街が見えてきた。地上に降りる考えが一瞬頭をよぎったが、結局そのまま通り

過ぎた。

「誰かと関わり合いになったら、せつかくの一人と一匹暮らしに水を差されるかもしれない」

「グゥ」

「何、お腹空いた？」

チョコが一声鳴いたので、リルが右手を差し出して魔力を分ける。人間のように肉や野菜も食べられるが、大食らいなため、こうして手っ取り早く魔力を分け与えた方が都合がいいのだ。

「とにかく、あの山からできるかぎり遠くに行こう」

リルは速度を上げた。

「うーん」

いくつかの山を越えたが、しつくりくる場所がなかなかない。森だらけだったり逆に砂漠状になっているところなど、何かが足りない。できれば今まで住んでいた山と似たところがいい。

「自給自足したいから、畑が作りやすいところにしたいなあ」

しばらく空中を彷徨っていたら、好ましい山を発見した。ちょうど腹も空いたので山に降りてみる。

「元のところよりだいぶ離れたから、場所的には大丈夫。あとは——」

開けた場所の土を触って確認する。やや乾燥しているが、雨が降れば問題ない。降らなければ降

らせればいい。草も生えているので、植物が生えない場所ではなさそう。

「お、やった」

近くに小川もあった。これで生活するには十分だ。リルはここを生活の拠点にすることに決めた。「人がいないし、近辺に人が入った様子もない。さすがに誰かの土地つてことはなさそう。まずは家を建てようか」

リルは風魔法で出した風を細長くして、木を切って回った。風で浮かし軽くさせた木を一か所に集める。チヨコも木を啜えて運ぶ。一人と一匹で家造りが始まった。

「水回りは難しいなあ。お風呂はどうか作れそうだけど、それ以外はさすがに誰かに頼んだ方がいいかな」

大変気が進まないが、一度街に行った方が良さそう。しかし、リルは嫌なことに気が付いてしまった。

「まずい。頼むだけのお金が無い」

サイの仕事の手伝いをした時はたまに小遣いをもらっていたが、山を下りる予定がなかったため、沢山もらえるよう頑張ることもせず、最低限だけもらって貯めていた。食べ物を買うくらいはできるが、四年前にもらった分を合わせても水回りの工事を頼めるような金額にはならない。

「うう……」

徹夜したときと同じ顔のリルが猫背で歩き出す。とても嫌だが、頼めるだけの金を稼がなければ

ならない。

「この世界でも働くのか……数日だけにしよ……」

チヨコがいるのがせめてもの救いだ。一人きりだったら、水洗トイレは諦めて穴を深く掘るだけという超絶原始的なものにしただろう。

街でどのような仕事があるのか分からないが、チヨコとともにとりあえず山から一番近い街へ行くことにした。山を下りるまでは風魔法で飛び、それからは徒歩で向かった。

「門だ。結構近い。山から三キロくらいかな」

しばらく行くと、大きな門が見えた。思いがけず、発展した都市にたどり着いてしまった。リルはげんなりした。

「人がいっぱい……」

できれば小さな街で、魔法の才能を活かして大工仕事などを手伝えればと思っていたが、そう上手くはいかなかった。

歩くだけで人酔いしてくる。山に引きこもって四年は伊達^{だて}ではない。

「仕事ってどうやって探せばいいんだろう」

ただ歩き回っても、当然仕事は舞い込んでこない。

「ねえ、あなた冒険者？」

と思っただけで違っただけ。突然声をかけられた。振り向くと、軽量の装備で剣を腰に差した女性

が立っていた。

——冒険者ってというのは、トレジャーハンターみたいな仕事？ もしくは魔物を倒したりしている人のこと？

そう考えつつリルは女性を観察する。剣を所持しているのを見るに、前者より後者の可能性が高い。しかし、それも憶測の域を出ないので、ひとまず話を合わせることにした。

「冒険者というか、仕事を探していて」

「ちょうど良かった。その可愛いウォルフを連れてるってことは魔法士よね？ 手伝ってほしい仕事があるの」

横にいるチヨコを見遣る。あまり目立ちたくないの、今は大型天程度の大きさに変えている。——魔法士って魔物を引き連れてたりするのかな？

いまいち分からないが、そう言われたということはそうなのだろう。もしも悪い魔物を倒すのが仕事であっても、魔法が使えてチヨコがいればある程度の魔物なら造作ない。

「すぐにここを離れる予定なので、そんなに時間がかからない仕事なら」

「ありがとう！ こっちよ！」

手招きされ、ついていく。

「私はミリィ。あなたは？」

「リルです」

「今日来たばかり？」

「うん」

ミリィは冒険者を生業としているらしい。とはいってもまだ半年経ったばかりの新人だという。突き当たりまで真つすぐ行くと、一軒の建物が見えた。

「ほら、あれがギルド」

「ギルド……」

なんとなくどこかで聞いたことがある。しかし、ここで詳しく聞くのは怪しまれるかもしれない。リルは黙って中に入った。

建物の中はまるでゲームの世界だった。

冒険者の恰好をした者たちがあちこちで盛り上がり、貼り紙を見つめる者、受付で何やら手続きをする者もいる。見慣れない光景にリルは眩暈がした。

「あれなんだけど」

ミリィが一枚の貼り紙を指差した。

「崖崩れが起きた道の整備？」

「そう。うちの村に続く道なんだけど、報酬が魔物退治とかより少ないから希望者が現れなくて」「人が通れるようにすればいいの？」

「うん」

立ち読みサンプル
はここまで

リルは頷いた。

「なら簡単だ。やるよ」

「やった！ すぐ手続きしましょ」

満面の笑みのミリイが貼り紙を剥がして受付へ急ぐ。受付にいた女性がにこやかに紙を受け取った。

「こちらですね。承知しました」

隣で身分証明書らしきものを提出しているのを目撃して内心焦ったが、リルに求められることはなかった。どうやら代表者が提示すればいいらしい。身分証明書など当然無いのでほっとした。

許可書を受け取ったミリイとともにギルドを出る。崖までは半日歩くと言われ、リルは提案した。

「歩くと時間がかかるから、風魔法で飛んでいこう」

「え、と、飛んで？」

「あ、嫌だった？」

「ううん！ 全然！」

ミリイはぶんぶん首を横に振った。嫌ではないなら話は早い。リルがミリイを抱えて風魔法を自分たちに施す。

「わ、わ、浮いたッ」

「ごめん。もしかして、飛ぶの初めてだった？」

この四年間、魔法が使えるサイとしか関わってこなかったので、世の中の常識が全く分からない。リルが謝ると、ミリイは両手を大げさに振った。

「謝らないで！ 慣れてないだけだから！」

慣れていないのなら止めようかと提案したが、ミリイが拒否したため、結局飛んでいくことになった。怪我をしないよう、リルが魔法の強さを調節してゆっくり飛行する。横で一緒に飛ぶウォルフを見て、ミリイが顔を強張らせていた。

それでも荒れた道を歩くよりずっと早く指定された土地に着いた。崖崩れのすぐ手前で地面に降りる。左側に崖がそびえていて、土砂はそこから落ちたようだ。そして右側は谷に続いている。

「すごい。もう着いた」

「うん。ちゃちゃつと済ませよう」

目の前には大岩があり、完全に道が塞がれている。ミリイの話では村へ行く唯一の道らしく、村の人たちが困っているということだった。

「爆発させたら早いけど道自体も壊れちゃうから、大きな岩をまず他のところに運んで、残ったものは風でまとめて運べばいいか」

「あの、私は何かすることある……？」

ミリイがおおずとお手を挙げる。リルは一度首を傾げてから答えた。

「道の向こうにすぐ村があるのかどうかの確認と、もし近くに人がいそうだったら近づかないよう